**古典学習陶冶会会員のための経済・経営講座　第1回　「長生きして、始末して、きばる」**

**古典学習陶冶会会長補佐　志水達也税理士事務所所長　志水達也**

　これは、近江商人・中井源左衛門（1716年～ 1805年）の「長寿を心掛、始末を第一に、商売に励むように」という子供達への教え（注1）が、このように伝わっているものです。近江商人と言えば、多くの優良企業の発祥として有名です（注2）。また、彼等には、例えば「三方よし」等、学ぶべき経営理念が多くあります。今回は、数ある近江商人の教えの中から、「長生きして、始末して、きばる」を紹介したいと思います。

まず、この一文中の「始末」とは、 物事の始めから末（終わり）の意から、収支を合わせる、片付ける、節約の意味を持ちます。また、「この騒ぎをして、この始末だ」等と悪い結果を表す言葉としても使われますが、中井はこの言葉に次のような格別の意味を込めています。

はじめに、中井家には中井家独特の帳合法が伝わっていました。それには、貸借対照表、損益計算書があり今日の複式簿記による財務諸表と同じ構造です。1873年に福沢諭吉によって西洋の複式簿記の教科書が日本で翻訳される数十年も前に、このような管理法が独自に考案されていたことには驚きです。その上で、中井は子供達に徹底した節約、すなわち、原価低減と経費削減を教えました。原価低減を、売値を一定にして原価を下げることと考えると、利益率は上昇します。しかし、近江商人は地方の商人に対して天秤棒で運んだ商品を売る卸売業でした。お客様の家に泊めてもらうことも多く、お客様が満足しなければ野宿ということにもなるので、お客様が納得する最低限の価格でしか商売できなかったはずです。従って利益率は下がりますが、そこは勤勉に、回転率を上げて粗利を確保する「薄利多売」でしのいだのでしょう。また、経費削減について、「酒宴、遊興、贅沢を禁じ」て、質素・倹約を教えています。

次に、「きばる（気張る）」とは、「商売に励む」と同義で、京・近江地方では「おきばりやす」と挨拶でも使われます。最後に、「長生きして」とは、金持ちになるには運もあるし、時間もかかる。だから、一生をかけて、さらに何代もかけて資産を増やしていくものだと教えているのです。

以上のとおり、中井に代表される近江商人達は、大儲けは出来なくとも、勤勉・質素・倹約によって、利益率は少なくとも確実な利益を、生涯を通じ、何世代もかけて蓄積するという家風を受け継いできたのです。日本に長寿企業が多いのも、このような家訓が伝えられているからこそです。企業の目的は「永続発展」にあります。そして、勤勉・質素・倹約こそ企業を「永続」させる不可欠の第一条件といえます。

（注1）、吉田實男、『商家の家訓』、（金持商人一枚起請文）、清文社

（注2）、近江商人を発祥とする企業には、高島屋、西武グループ、伊藤忠商事、丸紅、住友財閥、双日、日清紡、東レ、トヨタ自動車、日本生命保険、武田薬品工業等がある。